日本の芸能の聖地、道成寺

千年の時を超え心に響く真心の鐘

風姿‘和’伝
FUSHIWADEN
伝統芸能に息づく和歌山

㊤2007年、観世流宗家・観世清和（かんぜきよかず）さんを招き、道成寺境内で『道成寺』の薪能を公演。
㊧2004年のイベント『釣鐘お里がえり』では、中村福助さんが歌舞伎の女方舞踊の最高峰と言われる『京鹿子娘道成寺』を舞った。その他、道成寺では2005年に文楽『日高川入相花王（いりあいざくら）』を人間国宝・吉田簑助さんが、2006年には上方舞の山村流宗家・山村若さんが『新道成寺』などを演じている。

物語の舞台をひと目見に県外率98％の参拝者

日本の美を象徴する能楽や歌舞伎、文楽などの伝統芸能。そうした伝統芸能のいくつかに共通する「演目」がある。それが和歌山県の名刹「道成寺」に古くから語り継がれる、安珍清姫の悲恋を題材にした物語「道成寺もの」。記録に残っているだけで実に300以上。今でも坂東玉三郎など多くの演者が、30を超える道成寺ものから、いくつもの演目を選んで全国で演じている。近年、映画や演劇など古典芸能の枠を超える世界にまで広がりをみせ、新たな伝説を記している。

「さかのぼること平安時代の中期。1000年以上変わることなく、我々僧侶が語り継いできた物語。今もこの地で、365日変わることなくご来訪いただいた方々に絵とき説法として伝承しています」と話す小野俊成院代。

熊野詣の途中の安珍に清姫が一目惚れ。再会の約束を裏切られた清姫は大蛇になって安珍を追い、道成寺の鐘に逃げ込んだ安珍を焼き殺してしまう。この悲恋物語は、伝統芸能の演目ごとに少しずつストーリーを変化させているものの、あっと驚くすさまじい動きや台詞まわしに観客は息を飲む。静かな演技での表現が多い伝統芸能では珍しい動きや、感情の激しさが人々を魅了するのであろう。

「道成寺のあるこの日高川町を日本の芸能の聖地にしようと、6年前から地元住民も一緒に、一丸となって伝説の継承に力を入れています」と、小野院代。この地で行う能楽公演やお里がえりイベントなども取り組みのひとつ。現在、道成寺に鐘はないものの伝説の舞台をひと目見ようと、年間約22万人が訪れる。うち98％が県外からというのは驚きだ。「時代を経ても、目に見えなくても語り継ぐ心はひとつ。物語に込められた〝真心〟の伝承。それが心に響く鐘の音となって今、日本中に響き渡っているのです」

境内にはまるで清姫の情念がとぐろを巻いたような榧の木の「安珍塚」がある。2人を見守っていた現本尊千手観音菩薩（国宝）も、1000年以上変わることのない微笑みで参拝者を出迎えてくれる。

全国でも珍しい「絵とき説法」は年間を通じて3000回以上。人の手によって描き写される絵巻は今で10代目。聞けば、60歳でようやくベテランと認められる究極の説法なんだとか。

道成寺
住所／和歌山県日高郡日高川町鐘巻1738
電話／0738-22-0543
※絵とき説法は9:00～16:30までの年中無休で実施。
大人600円、小学生300円。